東北漫歩

（山形縣之卷）

和泉生

俳聖芭蕉をして「ここに哀れを象浮の浦」と詠歎せしめた象浮町から海岸線を辿ると、山形秋田兩縣界で出羽富士の稱ある鳥海山の裾に突き當る。古來有耶無耶關址と呼ばるる三崎峠である。「其の峠たる甚だ高からずと雖も、大石嶄巖、犬牙相接し、礫然山を爲し纔に人跡を通ず」との古記は、往昔の難所が偲ばれる。明治十年五月八日、時の縣令三島通庸氏が、兩縣通商往來の要を喝破し、夜を以て日に繼ぐ二箇月を費して開鑿成り、三崎新道と命名したのであるが、當時に於ては其の貢獻する所盡し筆紙に盡し難いものがあつたらう。右方に渺茫たる蒼海に孤立せる飛島を臨み、湯の田溫泉を過ぐれば、俗稱南光坊の急坂に懸る。昭和十二、十三兩年度に於て、直轄工事として貳拾參萬圓に物を言はせ、羅漢巖の名所を迂回する觀光道路が、文學味横溢する吹浦海岸を縫つて功を了へる恩惠は、東北地方のみに限らず、內地に於ける海岸線交通のエポツク・メーキングともならう。

最上川の河口に位し、古來、庄內地方並奥羽地方の咽喉を扼する本邦西海岸屈指の要港を持つ酒田市は、寛文十二年河村瑞軒の開航に依り、帆船時代は京阪地方の交易に繁榮を極め、奥羽の商權を殆んど掌握してゐたが、河口港の悲しさ、汽船海運の黎明期に入り年々衰頽の非が押寄せた。幸ひ最上川治水事業の附帶工事として、酒田港を最上川より分離し、上流よりの土砂堆積を救ひ、更に昭和八年度より工事費壹百六拾五萬圓を以て、防波堤の延長、護岸の築

設及港口の浚渫に着手して其の半を了し、今や諸工場の誘致等も著々進捗の途上にあるから、昔の殷盛を招來するのも遠くなからう。殊に酒田北鮮諸港間の定期航路開始は、其の實現を一層急速ならしむる拍車ともならう。

現市街は舊龜ケ崎城下で、西端兵陵には長汀曲浦を一幅に收める日和山公園がある。大正十四年十月、東宮殿下行啓の際築港狀況並最上川改修工事を御展望遊ばされ、翌年宮中の新年御歌會に於て畏くも

廣き野をなかれゆけども最上川
うみに入るまで濁らざりけり

と御詠進遊ばされた。之を記念せんが爲に建設された御歌碑は、永遠の光榮を物語つて頭が下る。西北一帶の光ケ丘松林は、封建の昔「本間樣には及びもないが、せめてなりたや殿樣に」と、巨萬の富商を謳はれた本間家の祖光壽翁が防風の爲植林の計を樹て、其の子孫百餘年の盡力に依るものだと謂ふ。本間家の別莊は市內濱畑町に在るが、萬頃の平野遙かに鳥海山を望みて風光秀麗、苑內には名花嘉樹極めて多く、泉石亦幽邃閑雅、殿樣跣足の豪勢さは唄通りである。

「五月雨をあつめて早し最上川」を渡ると羽前の國。羽前羽後を繫ぐ兩羽橋は、明治二十七年架橋せられたる木造橋であつたが、其の後大正四年九月、工事費四萬九千圓を以て上部を取替へたのみで十六年の星霜は流れた。經年久しきと、高速度交通機關の發達に伴ひ、到底當時の交通狀勢に對應し得ざる爲、昭和六年十二月之が架換工事に着手し四年八箇月を閱して昭和十一年八月竣功を遂げた。延長七百拾參米九、東北隨一の長橋であり、工事費八拾五萬圓は當に大英斷である。酒田鶴岡兩市間國道改築は、兩羽橋の着工に依り促進效を奏し、昭和八年度より十三年度迄、直轄工事として七拾七萬圓を投じた。本年度に於ても拾萬圓を以て繼續執行中に屬し、本區間の完成は今や目睫に迫り、舊國道に比し六粁の短縮は效果的だ。

鶴岡市は舊酒井藩拾七萬石の城下で人口四萬に垂んとし、庄內米の集散地である。濠洲、印度、亞弗利加、米國等

への輸出向絹織の產地として海外に喧傳され、「羽前繻子」と稱し年產參百萬圓を突破し、全國の九割を占めてゐる。

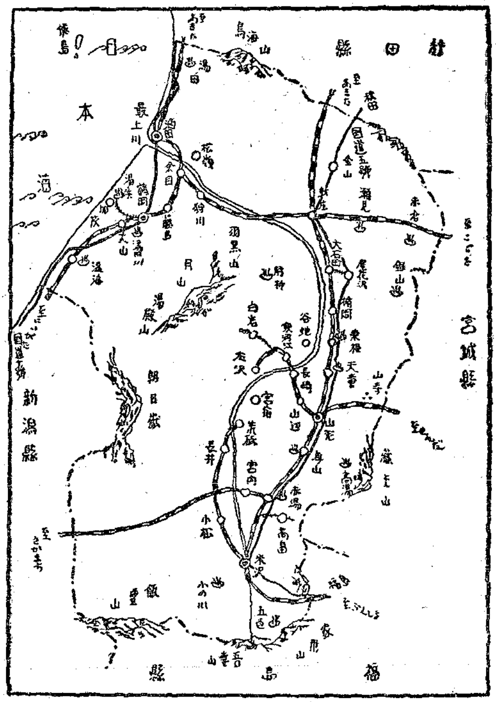
市の中央に在る鶴岡城址は、元和八年信州より轉封した酒井忠勝侯の創築にして、爾來賢主良弼頻出し、人文に興產に治績見るべきものが多かつた。天保年間、藩主忠德侯の越後高田國替の臺命に發端し、「雖爲百姓不事二君」と、貳十萬領民の蹶起せる「莊內義民傳」は、時の藩主が名君であつたことと、歷代君民一致の善政を物語るであらう。明治の大文豪高山樗牛出生の地である、肥後熊本五拾餘萬石を沒收せられた英傑加藤淸正の子忠廣の墳墓地でもある。

寬永九年六月、德川家光三代將軍は、肥後熊本城主加藤忠廣に二十一箇條の罪狀を並べて其罪を問ふ。忠廣覺えなき多かりしかば、上東して其罪の辨解を試みたり。然れ共幕議は忠廣を捕へて其所領五拾貳萬石を沒收し、忠廣を出羽國莊內へ流す。是の日除封の令下る。忠廣（三十六歲）妻子と決別し配流の旅に立ち、金山峠を越えて上ノ山を過ぎ、大石田より最上川を下り、淸川より陸路鶴岡に着く。時に六月十八日なりとの記錄は、榮枯盛衰は世の常と知りつつも一掬の涙を唆る。

莊內「おばこ」の花形は何と言つても、鶴岡おばこが一番だらう。酒田おばこも佳いが、濱育ちだけに氣性が荒く言語にも凄味があつて埒が明かぬ。そこへゆくと鶴岡おばこは、眞に乙女らしい純情さがある。若い男を絕對に鶴岡へ轉勤させなかつたとの挿話は、色々の想像と解釋に富むが、鶴岡おばこの秀逸を證明する事實として信じてもよからう。市北の縣社太宰府神社は菅公を祀り、例祭は五月二十五日で天神祭又は化物祭と稱す。敬神の男女が編笠を頭にして面を被り、思ひ〳〵に假裝して腰に一瓣を携げ、市內を練り歩く滑稽諧謔なる異風は鄕土色百パーセントの奇習である。

鶴岡市から酒の名釀地大山町を經ると磯の香漂ふ加茂町に達する。直ぐ北方の湯野濱溫泉と、十號國道に沿ふ新潟縣界近くの七色溫海は、共に海邊の歡樂境として知られ情緖豐かである。殊に溫海溫泉附近一帶の自然美は、古へよ

り俳人歌人の足跡を残し、「あつみ山や吹浦かけて夕涼み」や「樹の上に天狗の巣ある大清水」は、盛夏の都會人には堪らなく美しい。溫海川から小八粁、念珠の關は奇巖怪石亂立し、海中に屹立する辨天島の風趣亦賞すべく、煙波茫々の間に佐渡ケ島を遠望し、「一度行きたや」と詩情の湧くのも宜なる哉。



　山形縣の地勢は其の名に背かず、東に藏王、西に朝日、南に吾妻、北に鳥海の高山圍み、中央に靈峰月山を盟主とする出羽三山がある、其の裾を銀蛇の最上川が流れる。此の月山と最上川は、山形縣文化の母胎としてまた質實剛健なる縣民性の養源として郷土最大の誇りである。四時雪を載く月山は海拔壹千九百貳拾四米、その南麓の湯殿山壹千五百四米、北麓の羽黒山四百貳拾米にして、月山頂上には東北唯一の官幣大社、湯殿山及羽黒山上には國幣小社が夫々名稱に因むで鎭座し、關北無比の靈地として專崇篤く、男子十五歳の曉には試錬の初詣でを決行すると聞く。夏季の登山者頗る多く、白衣の行者絡繹として絕ゆることがない。今年も卯年の緣年に當るので嘸かし賑ふことだらう。月山の麓を庄內より山形市方面に出る唯一の道路に、府縣道鶴岡白岩線則ち六十里越街道がある、明治の初代床次竹次郎氏が山形縣參事官當時改築して以來、永く放置狀態にあつたが、二十三代長官川村貞四郎氏、政

友萬能の手腕を揮つて此の大改良を計畫し、昭和七、八兩年度に於て國庫補助事業として四拾貳萬八千圓の巨費を投じて敢行した。これが村山置賜兩地方と庄内方面との交通至便となり、人心の融和、產業文化の開發、そして一朝有事に際しては、軍事道路として重要なる使命を果し得るのは心强い。

酒田市より最上川を遡ること二十餘粁、幕末勤王の志士清川八郎の生地清川村がある。姓は齋藤、諱は正明、天下に卒先して尊王攘夷の大義を唱へ、山岡鐵舟、平野次郎等と劃策し東奔西走する所あつたが、文久二年刺客の手に斃る。山岡鐵舟の撰銘に曰く、

變々神采　昔者我友　慷慨憂國　身死人手
天嘉其節　雨露既厚　千秋萬古　斯人不朽

清川神社を東走すると、昭和十一年度東北振興事業の東雲橋が眼に附く。西條技師苦心の作だ。此處から本合海に至る間は名高い深谷急流を爲し、船を下すも街道を傳ふも共に觀光の極致である。就中「最上川瀧の白いとくる人の

ここによらぬはあらしとぞ思ふ」の白系の瀧は、高さ五十丈白雲を衝いて落下する態は眞に壯觀である。滔々最上川を逸れると交道の要路新庄町だ。戸澤氏堤封の城下であつたが、維新の際官軍に屬し、奥羽會盟の諸藩に抗して利あらず、城市とも兵燹に罹り殆ど昔の面影を止めぬが、農林省の積雪地方經濟調査所の存在が、情炎纒綿の新庄節と共に印象に殘る。附近には小國川に臨む瀨見溫泉が在る。

文治二年二月、頼朝追討の手を逃れむと、暫し吉野に匿れて天下の形勢を瞰望してゐた英雄九郎判官義經は、身を羽黑山伏に粧ひ、主從世を忍んでの北國落、安宅の關の危難は歌舞伎で屢々ものされて御承知の通り。危地念珠ケ關も武藏坊辨慶の奇智に救はれ、愈々出羽の國に入り清川に着いた。それより舟で最上川を上り、八向の大明神を伏し拜み、合海の津に船を繫いで新庄から舟形を經て、小國川の流域に浴ふて東し、龜割山の山間に差懸つた。偶々北の方が產氣附き玉の樣な一男を擧げた。辨慶は直ちに谿谷に下り、行々水源を探ねたるに、烟霧朦朧として咫尺を辨ぜ

ぬ石間に滾々として噴湧する溫泉を發見し、これを分娩兒の產湯に供した。

是が今の瀨見溫泉と傳ふ。婦人の名湯として知られ、釣鮎はわけて興深い。

新庄町より北進すれば雄勝峠だが、新庄節を逆に舟形、猿羽根峠を越えて尾花澤町に參らう。越後の高田、飛彈の高山と共に日本三雪の一として著名である。芭蕉此の地に俳友鈴木清風を訪ねたのであるが、「奥の細道」から拾つてみる。

屋花澤にて清風と言ふ者を尋ね、かれは富めるものなれども、志いやしからず、都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日々とゝめて長途のいたわりさまざまにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまるなり

と一句やつてゐるから、彼も暢然と御馳走になり、旅の疲れを癒したことだらう。自動車で三十分の銀山溫泉は、寛永元年九月の大洪水に湧出したのが起源らしい。其の以前加賀の國金澤の人、儀賀市郎左衞門氏の諸國行脚の途次、此の地に於て鑛石を發見して以來、延澤銀山として金及銀を產出し、「出羽の銀山裸で居ても金や寶は掘り次第」との唄が流行した程あつて、慶長の頃には町數八百八町、戶數四萬八千餘戶の隆盛さであつたことは全く夢物語の樣だ。

尾花澤町から五號國道を南下し、東根溫泉で國道を分岐する府縣道が梧岡仙臺線で、宮城縣界に關山隧道がある。昭和十一、十二年度東北振興事業として、本隧道並兩縣道路に參拾參萬餘圓をかけて約壹萬粁の改良を完了し、山形仙臺間の交通を一變せしめてゐるが、掌て三島通庸氏が、明治十三年七月一日工を起し、十五年一月十一日高さ二米五、幅員四米三の隧道を貫通したものだ。然るに通庸氏は此の工事の竣功を見ずして、其の春福島縣令に轉ぜられた。落成式擧行に當り、福島縣令として山田內務鄕を隨行し、宮城縣令松平正直氏、佐久間仙臺銀臺司令官、山形縣令折田平內氏等と臨席し、感激の餘り左の和歌一首を詠じた。

山を拔き谷を埋めて幾千代も

通ふ車の道となりけり

此の新道開通に依り陸羽の交通日に增し、馬車人力車の數も月と共に加へ、仙臺の物資と文化は此の隧道に依りて山形に移入せられ、明治二十年頃は正に黃金時代として交通景氣を謳歌し、十數軒の旅館、二十餘軒の茶屋は、行き交ふ旅人を收容し得なかつた繁榮振りであつたが、明治三十四年奧羽本線の鐵道開通に伴ひ急劇に衰微し、今は隧道脇にところてん名物の小茶店が一軒のみの寂寥さだ。

將棋駒の產地天童町に戻り、「閑しさや岩にしみ入る蟬の聲」の名刹山寺に千古の史蹟を探り、縣の首都山形市に入る。山形城址は霞ケ城として、遠く天平年間鎭守府將軍大野東人の創築と傳へらる。其の後最上義光に及んで庄內より秋田由利郡を侵略し、實收百餘萬石と稱せられたが、羽柴秀次罪ありて高野山に自殺するや、秀次に待したる義光の愛女お今の方も亦寵姬數十人と共に京三條河原に斬られた。義光深く秀吉を怨み、關ケ原の合戰にも伊達政宗と上杉勢を攻擊する所となつた。義光後三代目、所謂「最上騷動」に依り、二代將軍秀忠の爲にお家改易、悉く領土を沒收せられて以來、鳥井、保科、奧平、堀田等十萬石以上の諸侯及秋本、水野等少藩交々來り鎭する狀態で、城郭も漸次縮小すると同時に、市況も亦ふるわずして明治に至つてゐる。こんな譯でさしもの山形も總てが保守的となり、庄內置賜兩地方に人傑出づるも、當地方にはそれなき無念さである。

山形のづうづう辨と不思議な訛を聞いたら、多くの人は魯鈍で無神經な住民と想ふだらうが、一旦この言葉に親むと忘れ難い溫い情調に捉へられる。それは爐端の團欒に生れた言葉だからだ。維新前は京娘の唇を彩つたであらう紅花と、近代娘の頰つぺたにも似た櫻桃は海內第一であるが、櫻桃を摘むモンペ姿の山形女も滿更でない。大久保作次郎氏の感懷がこうだ。

山形に旅して、モンペ姿を見ましたのが初めてでした。野に山に働く婦人には甲斐々々しく至便のものと思つたのです。それに寒い土地では保溫にもよい樣です。モンペの

名が稀らしいので語源について人にたづねたのでしたが、或人はオランダ語であらうとの事でした。さう言へばオランダ繪の屏風に描かれてゐる人物の袴が實によく似てゐると思つたのです。何れにしても活動する婦人の袴としては絶好のものでせう。何時かは山形に重ねて旅してあの野趣のあるモンペ姿の婦女を題材にして作畫し度いと考へてゐます。

市内に七日町、三日町、五日町等と風變りな名稱の町が澤山あるが、これは幕府時代に商家が日を選んで市を開いた關係だと言はれてゐる。百姓町には、慶安四年三代將軍家光の喪に乘じて江戸城を燒打し、德川幕府の轉覆を謀つた妖傑由井正雪の同志丸橋忠彌の遺蹟があり、近郊には阿古耶姫と實方中將の眠る萬松寺がある。颯々たる松籟は物悲しい傳説を偲ぶに相應しい。お別れに味な「山形大津江」を御紹介して上山町に行かう。

樂しみも　苦しみも
嬉しきことも　浮きことも
世の有樣をつら〳〵と
人の身の上今日見れば
明日は我が身の上となる
實に定めなき浮雲の
月の光を見やしやんせ
晴れては曇り　曇りては晴れ渡る
みな何事もかくやらん
かならずくよ〳〵思はずに
心大きく持たしやんせ

山形上山間變更路線十粁の改築は、昭和五年一月六日山形市八日町誓願寺角より起工し、昭和七年十月十五日竣功した。昭和十年農村其他應急土木事業を機とし、更に之が鋪裝を完了したのであるが、改築費參拾參萬六千圓、鋪裝費七萬圓である。鋪裝費の低廉は全國一だらうが、安からう良からうとは仲々行かぬ。

昔より俗謠に謳はれたる上山溫泉は、松平山城守參萬石の居城地で、廢藩置縣の際上山縣廳を設置せられた地であ

る。「はるかなる上の山道たどりきて出湯にうさを忘れけるかな」も、今じや自動車で悠々三十分、深夜の急行自動車は十五分で飛ぶ。これじや山形が寂れて溫泉が賑ふのも不思議ではない。聖僧澤庵老師の俤を偲ぶ春雨庵跡及忠川池の清遊は、旅情の徒然を慰むるに佳く、銀嶺藏王山の樹水美は、獨逸のフアンク映畫班に依つて世界一の折紙を附けられ、冬のヒュッテ附近は、スキーヤー憧れの天惠的スロープである。上山町を出て間もなく、所謂置賜地方に入る米澤領。赤湯溫泉を素通りして、遙かに龜岡の文珠樣に兩手を合せ一路米澤市へ急ぐ。

鶴の翔り舞ふ姿に象つた城下街米澤市は、中興の明君上杉鷹山公銳意天產を以て機業を奬勵したる結果、米澤織の產地として名聲を天下に馳せたが、輓近人絹の發祥地として知られ其の躍進的發展は物凄い。市の中央に米澤城址たる松岬公園が在り、ここには謙信公を祀る上杉神社、鷹山公を祀る松岬神社がある。上杉家歷代の廟所を初め、一世の奇傑維新の志士雲井龍雄、名將直江山城守兼續等の墓所或は米澤鄕土館、法泉寺、常信庵等巡歷の數は遺に史蹟地の名に恥ぬが、北山原殉敎遺蹟は異色である。今を去る三百餘年の寬永五年十二月、基督敎徒甘糟伊右衞門一族を血祭に、五十七名斬首の刑に處せられたる殉敎徒の密葬地で昭和四年天主敎徒の主唱によつて殉敎碑が建立せられた。

鷹山公名は治憲、明和年間襲封の當時、封內衰弊し上下困憊の極に達せるを憂ひ、大儉の政令を布き、實踐躬行大いに產業を奬勵し又文武の道を鼓吹したる結果、領內自給し文武節儉の風を爲すに至る。其の傳統こそ、現代に於て黑井、山下兩海軍大將を生み、池田、結城兩元藏相を送つた賜物ではなからうか。西南の愛宕山に鷹山公祈雨の遺跡がある。明和八年夏旱魃甚しく農民耕耘に窘む。公痛く憂ひ給ひ、六月五日の曉天に草鞋を召され、愛宕山に登つて雨を禱られた。至誠神に通じてか、一天俄に搔き曇り驟雨沛然として降り來る。下山に及んで雨脚愈々繁く、左右の者長柄傘を翳さんとしたるに、公顧て、今祈請の感應あり天此の惠を降し給ふに、何とて禦ぐことやあると、悠然雨に

濡れて歸城せられた。沿道の士民皆雨に打たれて嗚咽拜伏した。此の雨降ること實に一日一夜、爲に枯苗蘇息したと謂ふ。又東南郊關根に「一字一涙碑」がある。國學者細井平洲、鷹山公の懇請に依り國學を藩士に講ずること七年、安永六年辭して江戸に歸つたが、鷹山公御隱退後平洲先生と相見えざること十三年に及び、恭敬思慕の情に堪へ難く、遂に寛政八年再下向を要請したる處、平洲先生七十の老齢に拘らず快諾し米澤に到らんとした。鷹山公親しく師を山上村關根の名刹羽黒堂普門院に迎えたことは史上著名であるが、此の迎師の史跡を記念する碑が「一字一涙碑」で、今尚師道尊重に於ける千古の美談として世に語り傳へられ、佇む人の胸に無言の感激が犇々と迫る。

米澤市を南へ十七粁、山形福島兩縣界栗子峠に通ずる。昭和八、九、十の三箇年度に於て四拾七萬八千圓の巨費をかけ、劃期的直轄國道工事として世人の耳目を震動せしめたことは、未だに腦裏を去らないが、此の隧道も亦三島通庸氏の卓見と斷乎たる所信の遂行に依り開鑿されたものである。其の開鑿誌を明治二十九年山形縣第二課編纂に係る「國縣道路調査原稿」に求めるのも無默ではなからう。

本道開鑿ノ計畫ハ明治九年ニシテ、其十月該地方ヘ主任ヲ派遣シ適當ノ線路ヲ求メシム。探ルニ先ツ赤濱及板谷近傍ヨリス。赤湯線ハ刈安村ヨリ入リ、南明神峠ヲ越ヘ板谷驛ニ達スルモノ、是レ慶長年度前ノ道ナリト言フ。又小栗子越及甲森越ナルモノアリト雖モ、福島縣管内ニ至リ字明ケ通シ、鷹落シ等ノ大難所アリ、之レヲ經サレハ中野村ニ達スル能ハス。其斷岸絶壁到底得テ線路トナスヘキノ地ニアラサルヲ相シ、更ニ刈安村ノ方面ヲ跋渉シ、嶺ニ攀シ澗ニ下リ、搜索丁寧、遂ニ栗子山ノ半腹ヲ穿チテ隧道トナスノ外恰適ノ線路ヲ得サルヲ知ル。是ニ於テ廳議一決、福島縣ニ議ルニ接續路線開鑿ノ事ヲ以テス。先ニ福島縣ニ於テモ亦此方面ニ一線路ヲ開鑿スルノ議アリシヲ以テ、直チニ之レニ應シ兩縣共ニ其工ヲ起スニ至ル。

本新道中米澤ヨリ栗子山隧道ニ至ル間、刈安村ニ一ノ隧道ヲ設ク。長三十六間、明治九年十一月二十五日工ヲ起シ

翌十年二月十一日ヲ以テ貫通ス。續テ栗子山隧道ニ着手ス。實ニ同九年十二月二十日ナリ。時已ニ積雪山ヲ埋メ、加之岩質堅硬、工事ノ難想フヘク、同十三年十月十九日ニ至リ、全長四百八十二間ノ掘鑿ヲ了リ竣工ヲ告ク。其歳月ノ久キニ彌ルモノ決シテ偶然ニアラサルナリ。刈安ヨリ瀧ノ澤ヲ經テ栗子隧道ニ達スルノ間ハ、古來傳テ人跡ノ未タ至ラサル所トス。今其新線路ヲ見或ハ山上ニ出テ或ハ山腹ニ沿ヒ、溪ニ前シ、澗ニ背キ、曲折迂餘龍蟠蚊屈ヲ極ム。是迂遠ニ似タリト雖モ、登躋ノ竣急ヲ避ケ適當ノ勾配ヲ取ルニ於テ、實ニ止ムヲ得サルニ出ツ。其新道ノ里程ヲ算スルニ、米澤市上花澤信濃町ヨリ刈安村隧道ニ至ル三里弱、同所ヨリ瀧ノ澤ニ至ル三十丁餘、瀧ノ澤ヨリ栗子山隧道ニ至ル三十餘丁、延長四里十八丁許ニシテ、其間石橋二箇所木橋五箇所トス。瀧ノ澤ヨリ隧道迄直高百三十五間、隧道ヨリ栗子山絶頂迄同百二十間、而シテ其高低ヲ板谷嶺ニ比スルニ、隧道ノ位置ヲ以テ稍高シトナスト雖モ、適當ノ勾配ニ依リタルヲ以テ車馬交通ノ便ニ至リテハ、遙ニ板谷街道ノ比ニアラサルヲ知ル。

以上ノ工事ハ直接關係アル米澤市民ヲシテ有志夫ヲ出サシメ、其他同市ノ有志者官吏等ヨリ代夫ヲ寄附シタルモノヲ合セ、總數壹萬五千餘人トス。工費ハ相生、吾妻ノ二橋ヲ除クノ外（此二橋ハ國庫費ニ屬スルヲ以テナリ）九萬五千圓ノ人民ノ負擔ニ係ルモノ及ヒ栗子隧道開鑿工費ニ對シ十四年五月二十三日、國庫ヨリ補助セラレタル金參萬千九百四拾四圓五拾七錢ヲ合シ、計金拾貳萬八千九百四拾四圓五拾七錢ヲ以テ遂ニ其功ヲ奏ス。

當時我國ニ於テ未タ曾テ栗子隧道ノ如ク、其長サ四百八拾貳間、幅參間、高サ貳間ナルモノアラサルヲ以テ、政府モ其成否ヲ猜疑シ、一方ニハ人民ノ巨萬ノ負擔ニ苦ムアリテ多少ノ物議ヲ招キタリト雖モ、三島氏ノ英斷果決一モ逡巡スル所アラス。工ヲ明治九年十二月二十日ニ起シテヨリ夜ヲ以テ日ニ繼キ、月ヲ累スルモノ四十有餘、同十三年十月十九日ヲ以テ貫通スルヲ得。是ニ於テ公衆ノ便益始テ起リ、貨物ノ集散其宜キニ適シ、傍ラ人智ノ開達産業ノ興起

ヲ資クルモノ決シテ尠少ナラサルニ至レリ。同十四年車駕北巡、本道ヲ通輦セラレ、十五年二月九日勅シテ萬世大路ト稱ス。三十九號國道卽チ是ナリ。爾來縣稅ヲ以テ其維持修繕ヲ負擔ス。

三島通庸氏の道路縣令たりしは、今更喋々するまでもないが、現在山形縣に於ける隣縣連絡道路の凡てが、彼の心血の結晶であると斷言して憚らない。「富國强兵の基は產業開發にあり、產業興隆は道路運搬の便を得るにあり」との彼の信條こそ我等に與へる尊い敎訓である。

岩がねの重なる山の奥までも
道踏み分けよ萬世の爲め

國のため盡す心は陸奥の山の
穴道ふみてこそ知れ

此の火を吐く意氣でこそ山にも穴が明くと言ふものだらう。勇躍馬上に采配する彼の壯姿が髣髴として熱血迸るを覺ゆ。今の知事さんに果して此の意氣ありやである。賣名本位の土木部課長連に一歌煎じてやつたら、口には苦いが良藥とならう。

三島通庸氏は天保六年鹿兒島上之園に生る。幼名を林太郎と言ひ、彌平又は千木と稱した。父通純は情熱に富み、氣骨稜々たる薩摩男子で而かも多藝多能、藩公島津家に仕へ鼓の師範をなし、母池上氏亦性快活淸爽であつた。通庸氏十二歲にして小野鄕右衞門に就き示現流の劍法を學び、町田四郎次郎に師事して經書を修め、十八九歲の頃伊知地正治に就きて兵書を習ふ。通庸氏の剛毅にして機略裁斷の神速なる氏に負ふ所多く、同鄕の先輩に南州あり、竹馬の友に西鄕從道、同志として大久保利通あるの外、意氣投合せる桐野利秋、黑田淸隆、伊藤博文等と亦交情淺からぬものがあつた。通庸氏は體軀偉大、眼光烱々、顎鬚豐なる好丈夫で、資性豪膽果決又非凡なる識見を有し、自信力に富み世の毀譽褒貶の如き毫も顧る所なく、事に當るや用意周到、誠實にして所志を貫徹せずんば止まず、其の難局に方るや寢食を忘れ自ら第一線に立ちて範を下僚に示す。而も屬僚に對しては深き同情あり、信じて業を一任す。故に下

僚皆心服したりと謂ふ。南州の信任殊の外篤く、其の政治的手腕を認められ明治四年東京府知事に薦められたるも、固辭して大久保利通を推した。此の一事を以てしても其の爲人が察せられる。通庸氏が酒田縣令に任ぜられたのは明治七年十二月で、利通が飛ぶ鳥落す內務卿時代であつた。若し通庸氏が南州の推薦を固辭しなかつたら、或は兩者の椅子が顚倒してゐたかも知れぬ。通庸氏は土木事業のみに偏らず、力を敎育產業に注ぎ縣下文化の一新期を劃した。明治十五年一月福島縣令に轉任、翌年栃木縣令を兼任した。十七年內務省に出仕土木局長を命ぜられ、翌年警視總監となる。十九年建築局副總裁を仰付けられ、翌二十年特旨を以て子爵を授けらる。二十一年正三位勳二等に叙せられたるも、同年十月病を得て薨去す。享年五十四歲。

山形縣に於ける道路共進會加入團體數は實に五百を算し、北村山郡大石田町を筆頭に各町村の眞劍味は大いに賞すべきものがある。縣當局も「道路愛護の歌」や「標語」を發表して、熾に道路愛護熱を鼓吹して居る。

一、愛の光に輝く道路　映せ奉仕の笑ひ顏

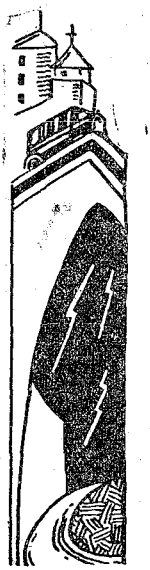
二、道路愛護の心の花は　國に文化の實を結ぶ

三、通る道路に感謝と愛護　道の父たれ母となれ

その外各土木出張所、愛護團體、或は尋常小學校にも、道路に關する公共心を涵養し且道路愛護の思想を普及し、其の機能を向上せしむる俚謠や金言等も尠くないが、自由詩なんて洒落たものもあつて、明朗奉仕の誠意の程が伺はれる。斯る官民不斷の協力と自覺こそ、三島縣令以來光輝ある山形縣道路の榮譽を確保し得たのであつて、堂々秋田縣の道路と爭覇の鎬を削つてゐるのも、當然と言へば當然であらう。

土木課長佐々木氏は、靑森縣土木課長だつた小坂氏が、愛知縣道路課長時代の戀女房で、昭和十三年一月小坂氏に九箇所遲れて同じ東北の山形縣に榮轉したのも何かの因緣であらう。佐々木氏の頭腦明晰と寡言實行は定評である。赴任以來道路に大車輪をかけ、寄附金をあつさり維持修繕費に塡め込む手際等鮮かなものだ。經濟部長小坂氏は、長い

間内務省で道路行政を研磨した玄人だ。がつちり腕を組みもつと〳〵、道路維持修繕費を増額する樣頑張つて貰ひたい。論へ長官が畑違ひの御人にしろ、農林省切つての俊才だつたから、眞逆道路を潰して田畑にせよとも仰言るまい。

今は群馬縣道路主事に返り咲きした東海林氏が、山形縣道路主事時代に突然山形土木出張所長への左遷事件は、我々に驚異の眼を瞬らしめ、土木界の非難囂々たるものがあつた。よくもあんな人事が敢行し得たものだと、時の幹部に對する不滿は處嫌はず激流の渦紋を生じ、殊に佐々木氏への痛烈なる攻撃は怒濤の如く劇しかつた。然し此の異動は、彼の留守中の椿事であつて、彼の意思が全然閑却されてゐたのは確な事實であり、これが取止め工作に奔走しようと急遽歸廳したのであるが、悲しい乎、其處には萬事休すの傷氣な運命が待つてゐた。此の暗討人事以來彼の苦惱と焦躁はどんなであつたらう。遣瀬なき日が幾日も訪れた彼の姿に、眞情を知る者のみの美しい涙が注がれた。本事件も昨年十月東海林、青木兩主事の入替に依つて圓滿解決し、嵐のあとの靜けさに戻つたが、斯る人事の失敗こそ、道路行政の痛はしき破壞であり、斯の如き矛盾が永遠に葬られることこそ、躍進への輝しき希望であり、明日への尊き出發であることは論を俟たない。

顧れば昭和二年、總工事費九百五拾壹萬七千圓の大豫算を議決、昭和三年度より十箇年繼續事業として、縣下道路網の大改良計畫を樹立し、三島時代の再來を偲ばしめた豪華の歴史が、壯圖挫折の挽歌を奏でようとも、再び巡り來む春の前奏曲として心快く耳を傾けよう。(完)